

## 2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施

### 【調査研究の評価軸及び評価指標等】

#### (1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究

##### ①有形文化財（美術工芸品、建造物）及び伝統的建造物群に関する調査研究

評価軸：我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に寄与しているか。	
成果	<p>美術工芸品については、「遊行上人縁起絵」諸本や佐竹永海・永湖・永陵の作品及び黒田清輝宛書簡の翻刻・考察を行い、作品の背景となる時代等について新たな知見を得た。</p> <p>建造物については、法隆寺古材調査によって、古代建造物の技法に関して新たな知見を得た。</p> <p>以上のことから、我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に寄与することができた。</p>
評価軸：有形文化財の保存修復等に寄与しているか。	
成果	<p>近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究において、仁和寺・薬師寺等、未整理のものを含む歴史資料・書跡資料の調査を行って内容を把握するとともに、その保存を図り、活用可能な状態に整理を行い、今後の保存に関する方向性を示すことができた。</p> <p>若桜町の伝統的建造物群について表記保存対策の調査を行い、重要伝統的建造物群保存地区選定へ寄与した。</p> <p>以上のことから、有形文化財の保存修復等に寄与することができた。</p>

##### ②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査研究

評価軸：無形文化財、無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に寄与しているか。	
成果	<p>継承の危機に瀕している無形文化遺産の内、社会的な認知度が低い選定保存技術に関して、『選定保存技術資料集』（日・英2ヶ国語版）を刊行することができた。また、国内の無形文化遺産について、全国的な統括リストが存在しないことを受け、文化庁及び全国地方自治体の協力の下、無形民俗文化財を中心とする網羅的な所在調査を実施し、併せて「無形文化遺産アーカイブス」の開発と公開を行った。</p> <p>以上のことから、無形文化財、無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に寄与することができた。</p>

##### ③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究

評価軸：記念物の保存・活用に寄与しているか。	
成果	<p>遺跡整備・活用研究集会を「近世城跡の近現代」をテーマとして実施し、近代以降の近世城跡の変容を様々な観点から具体的に取り上げ、それらの歴史的位置付けを明らかにしようと試みた。また、27年度当該研究集会の報告書『デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用』（12月刊行）において、研究集会の発表内容に加え、最新の事例をまとめ、同様の事業を計画している自治体等に情報提供を行うことができた。</p> <p>以上のことから、記念物の保存・活用に寄与することができた。</p>
評価軸：古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与しているか。	
成果	<p>平城京跡においては東大寺東塔の調査を行い、鎌倉再建期のみならず、天平創建期の基壇外装を良好な状態で確認し、当初の規模や構造を明らかにする重要な成果を得た。</p> <p>藤原宮跡では大極殿南門全面の発掘調査を行い、大宝元年元日朝賀の際に立てられた7本の幢幡にかかわる遺構を検出した。『続日本紀』に律令国家完成の宣言として記される重要な行事の様相を具体的に復元する手がかりを得たことは極めて重要である。また、7本の幢幡を立てる儀式の成立及び展開過程のみなら</p>

	<p>ず、陰陽五行思想との関連も明らかとなり、今後の国家儀式研究の発展に多大な寄与をする重要な成果である。</p> <p>また、飛鳥・藤原地区で出土した土器や瓦の胎土分析を進め、それぞれの産地に関する一定の成果を得ることができた。特に瀬田遺跡出土の弥生時代編み籠では、これまで用途不明であった木製品が編み籠の脚部であることが判明するという重要な知見が得られた。</p> <p>以上のことから、古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与することができた。</p>
<p>評価軸：文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展に寄与しているか。</p>	
<p>成果</p>	<p>文化的景観に関する研究集会を開催し、現状に関する情報を集約するとともに、今後の在り方に関して意見を交換した。また、文化的景観学検討会を開催し、文化的景観の概念及び調査・計画手法等の体系化に関する検討を進めた。成果の一部を、四万十市及び岐阜市の文化的景観についてまとめ、『文化的景観スタディーズ第3冊』として公表した。さらに宇治市・金沢市等で実地調査を行い、文化的景観の保護の在り方について検討を深めた。</p> <p>以上のことから、文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展に寄与することができた。</p>
<p>評価軸：埋蔵文化財に関する研究の深化に寄与しているか。</p>	
<p>成果</p>	<p>第20回古代官衙・集落研究集会「郡庁域の空間構成」を開催し、古代国家形成の分析や古代都城研究に資する研究成果を得た。当該研究集会では、郡衙遺跡中枢部の郡庁域に焦点を絞り、官衙の特性や地域の特徴とそれらの事象の歴史的意義付けを論じた。特に廃絶期の廃棄土坑を巡る議論は新たな研究の視点をもたらすものとなり、全国の文化財担当職員等との調査・研究情報の交換を通じて、研究の質的向上に資することができた。</p> <p>加えて、「第17回シンポジウム 8世紀の瓦づくりVI「飛雲文軒瓦の展開」」を開催し、当該時期における中央と地方との関係の在り方を明らかにする研究成果を得た。当該シンポジウムでは、飛雲文の資料について集成を行い、この文様が奈良時代半ばに出現し、平安時代に入ってもなお使用されていること、各地への伝播の仕方が複雑であることが明らかになり、全国の文化財担当職員、大学の研究者等との調査・研究・情報の交換を通じて、今後の古代瓦研究の向上に貢献した。</p> <p>また、国内外の水中遺跡の保存と活用に関する取組を調査し、モデルケースとして4県（新潟県、滋賀県、福岡県、長崎県）について、周知の遺跡の詳細と現状把握、文献に掲載された沈没船・漂着物等に関する情報とそれぞれの県内の水中文化財保護に対する体制についても情報の収集を実施した。福岡県及び宗像市の協力のもと、遺跡探査技術の理解を深めるため、福岡県沖ノ島周辺にて海底探査を実施した。さらに、地方自治体が主体となって実施した遺跡調査事業（福岡県新宮町及び沖縄県多良間村）において、水中での記録作業や活用方法などの技術協力を行った。保存手法と活用・展示方法の研究として、長崎県松浦市の鷹島海底遺跡・新宮町相島海底遺跡の出土遺物のX線CTスキャンによる調査を実施した。水中で現位置のまま保存された遺跡の活用方法について、海底ミュージアムの先進的な事例として知られるイタリアのバイア海底公園にて現地調査を実施した。中国の南海1号船の引き上げプロジェクトと保存処理の手法について現地の海のシルクロード博物館（広東海上糸絹之路博物館）にて調査を実施した。25年度から実施している諸外国の調査の中から、オーストラリア及びオランダについて保護管理体制やキャパシティービルディングについて再考察を実施した。また、国内の実践的な探査方法や活用について、琵琶湖の湖底遺跡の活用について調査を実施した。結果として、国内外の水中遺跡の探査・保存・活用に関する取り組みを進めることができた。</p> <p>以上のことから、埋蔵文化財に関する研究の深化に寄与することができた。</p>

モニタリング指標

		第3期中期期間平均	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
論文等数	九博	1.3	2				
	東文研	14.8	13				
	奈文研	71.4	37				
	計	87.5	52				
報告書等の 刊行数	九博	1.0	2				
	東文研	1.4	3				
	奈文研	25.2	16				
	計	27.6	21				

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究

①文化財の調査手法に関する研究開発

評価軸：科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に寄与しているか。	
成果	<p>デジタル画像の形成方法の研究開発について、不規則な平面を有する文化財の画像情報の取得・形成やガラス乾板など古写真の情報の活用を中心に検討し多数の光学調査を行った。また、奈良国立博物館・東京文化財研究所共同研究成果報告《国宝 絹本著色十一面観音像》を12月21日にウェブ公開した。これは、軽快な高精細画像の拡大・縮小に加えて、蛍光X線分析による調査が行われた画面上のポイントと分析データを紐付けして公開できるように加工したもので、さらに撮影に用いた光源から任意の2種による画像を表示して同時に拡大・縮小できるようにするなど、紙媒体にはないウェブ公開の特徴を最大に生かしたものにすることができた。</p> <p>埋蔵文化財の計測方法に関する実例研究を進め、瓦をはじめとする三次元計測方法の普及と技術移転に取り組んだ。</p> <p>年輪年代学研究では薬師寺東塔で解体された部材に関する年輪年代学的計測を行い、729年・730年の年代を得ることができ、東塔の建立年代に貴重なデータを提供した。</p> <p>以上のことから、科学技術を的確に応用し、文化財の調査手法の正確性、効率性等の向上に寄与することができた。</p>

②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究

評価軸：科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の質的向上に寄与しているか。	
成果	<p>歴史的建造物の温風殺虫処置に向けた研究に着手し、処理効果判定のための害虫生息調査において、飛翔性昆虫を衝突させて捕獲するフライト・インターセプション・トラップを新たに適用して成果を得た。</p> <p>セロファンテープ等の粘着テープを有機溶媒によって除去する方法や緑青焼けを起こしている作品の修復方法に応用できる成果を得た。</p> <p>キトラ古墳壁画の彩色に関する科学的分析を行い、壁画表面のクリーニング方法、特に以前に使用された修理材料のある中での汚れの除去方法に焦点を当てて、漆喰の強度を保ちつつクリーニングを行う方法に関する検討を行った。これは日本では従来行われていない修復方法であり、得られた成果を修復現場に還元できた。</p> <p>高松塚古墳とキトラ古墳の壁画調査・修復及び保存・公開に技術的な協力をを行い、それぞれの保存・修復・公開に寄与した。加えて、古墳壁画の新しい分析手法として携帯型X線回折装置の開発・改良及び漆喰試料を用いた試用実験、模擬石室の環境モニタリングを実施し、恒久的保存に向けた問題に取り組み、新し</p>

	<p>い方向性を示すことができた。</p> <p>以上のことから、科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の質的向上に寄与することができた。</p>
--	---

モニタリング指標

		第3期中期期間平均	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
論文等数	東文研	16.4	18				
	奈文研	26.2	34				
	計	42.6	52				
報告書等の 刊行数	東文研	5.0	5				
	奈文研	2.6	1				
	計	7.6	6				